

雲仙市

担当課	総務部 政策企画課
担当者	参事補 三宅 勝也
電話	0957-38-3111
FAX	0957-38-3514

「雲仙人（くもせんじん）サロン」の開催について

雲仙市では、市民協働による第2次雲仙市総合計画の将来像の実現を図ることを目的に、総務省の「地域力創造アドバイザー制度」を活用しています。

その事業の一環として、市内で多様な活動をされている方々に繋がっていただきたく、ネットワーク会議「雲仙人サロン」を下記及び別添のとおり、開催します。

参加者には、「他の人はどうやってパッケージデザインをしているのか」「イベントにどうやってスタッフやお客様を集めているのか」などなど、悩みや工夫を披露しあい、互いの体験を共有してもらうことで、互いを支え合う場として活用していただこうと考えています。

記

- 日 時： 令和2年2月27日（木）18時30分～20時30分
- 会 場： みゆき蒲鉾本舗
（住所：雲仙市国見町土黒甲44-14）
- テーマ： 「かんぼこ物語」
- スピーカー： 久山つや子さん（みゆき蒲鉾本舗）
- 次 第：（1）スピーカーによる基調講演（キーノートスピーチ）【30~40分】
（2）自由な意見交換【1時間20分】



「雲仙人サロン」のご案内

雲仙市には、地域を愛し、独自の技術やこだわりで「モノづくり」「コトおこし」に頑張っている方がたくさんいます。この方々を“雲仙人（くもせんニン）”と呼び、繋がり、学び合う場「雲仙人サロン」を開きます。どなたでも参加できます、お誘いあわせお運びください。

■テーマ：2つにこだわるサロンです。

- 1) 「モノづくり」＝新商品開発
- 2) 「コトおこし」＝催し企画、付加価値付け

■仕組み：誰かの話を聞くサロン、視察に出かけるサロン、わいわい話すサロンを開催。

■コーディネーター：野口智子さん

（ゆとり研究所、スローライフ・ジャパン。地域力創造アドバイザー）

■参加者：「モノづくり」「コトおこし」まちづくりに興味のある方ならどなたでも。

■参加費：無料

■第15回サロン：**2月27日(木)18時30分～20時30分** ※詳細は別紙

■スピーカー：みゆき蒲鉾本舗 久山つや子さん

■お問い合わせ先：雲仙市 総務部 政策企画課（担当：三宅、益田）

電話：0957-38-3111（内線：2553）FAX：0957-38-3514

メール：kikaku@city.unzen.lg.jp

<今回の概要>

●日 時：令和2年2月27日（木）18時30分～20時30分

●会 場：みゆき蒲鉾本舗

（住所：雲仙市国見町土黒甲 44-14 島原鉄道多比良駅から徒歩5分）

●テーマ：「かんぼこ物語」

●スピーカー：久山つや子さん

雲仙市では「かんぼこ」と呼ばれる「蒲鉾」、そして、ちくわ・天ぷらなど、これら一筋60年、地域の味にこだわってきたみゆき蒲鉾さん。看板商品の「豆腐蒲鉾」は、島原半島で100年以上の歴史をもつ伝統の味でもあります。ここで采配をふるい、新商品を次々と開発してきた久山つや子さんは、いつも飛び切りの笑顔、会う人を次々と元気してくれます。私たちが当たり前に行っている「かんぼこ」の歴史、商品開発の秘話、商売の極意など“久山節”をたっぷりとうかがいましょう。普段からお店で様々な「かんぼこ」の試食ができますが、今回のサロンでも試食をお願いします。



<前回の内容>

- 日時：令和元年 12 月 12 日（木）13 時半～16 時
- 場所：島原市有明町「本多木蠟工業所」
（住所：島原市有明町大三東丙 545）
- テーマ：「和ろうそくを知ろう」（モノ・コト）
- スピーカー：本多俊一さん（本多木蠟工業所代表）



お出かけサロンとして 8 人で訪ねました。本多さんは「雲仙人」サロン当初から参加されてきた方です。今回はご好意でハゼの実を搾るところを見せていただきました。

島原鉄道大三東駅からすぐのところにある本多木蠟工業所、うかがうと濛々と湯気が立ち込め、ハゼの実が蒸されていました。続いて圧搾機にそれを移します。この機械は日本で唯一の伝統玉締め式圧搾機というもの。化学薬品を使って大量に蠟を搾るのとは違う、古来の方法です。「江戸時代から続く伝統技法で木蠟を作るのは全国でここだけです」と本多さん（写真）の説明。昭和 12 年に造ら

れた機械が動き、見事に蠟が流れ出て来ると参加者から歓声が上がりました。

和ろうそくの芯はイグサを巻いて作っており、そこには煙突のように空気が流れるので瞬くように炎が揺らぎます。芯として糸が通っているだけの洋ろうそくにはない現象です。「揺らぐ炎は、精神の癒しの効果があるということで、セラピストの方々が好まれます」とのことです。



見学や説明をうかがったあと、ろうそく作りや絵付けの体験もする予定でしたが、それよりも今回はハゼ畑の見学という特別メニューに変更となりました。少し山側に入ると、突然ハゼの樹が茂る畑が広がります。本多さんのお祖父様が植えたハゼが見事な大木となっています。まだ残った今季最後のハゼの実を収穫中でした。

1792 年雲仙普賢岳の噴火で大被害を受けた島原藩は、火山灰に強いハゼの樹を植えることを奨励し、蠟を作り、財政を立て直しました。その後、世の中の変化でだんだんハゼ畑は減りましたが、さらに 1991 年の噴火で残っていたハゼ畑は再び被害を受け、いよいよハゼは絶滅危機に陥っているそうです。「ハゼ負け、かぶれを皆さん気にしますが、実が着く頃になるとカブレの成分がなくなります。それを知って付き合えばいい。紅葉はきれいだし、ちゃんと作物としてお金になる。ハゼを欲しがっているところは全国にたくさんあり、今や全然足りません。ぜひハゼを栽培してほしい」と本多さんは力説します。

「春に、ワラビ採りにまたみんなで来よう！」「来年はハゼの実の“ちぎり子”さんとして手伝いたい」「我が旅館にひとつ燭台を注文し、お客様を和ろうそくで迎えたい」「クリスマスのパーティーに揺らぐ和ろうそくがおしゃれかも」「外国人の方が喜びそう」など、いろいろな意見を残しながら散会となりました。

